

Growth and development of mentally and developmentally disable children's nature experiences from the perspective of parents

Kanae Watanabe

Abstract

A diversity of experiences contributes to children's development and helps foster a zest for living. In particular, experiences in nature during childhood are important. However, disabled children have extremely limited opportunities to experience nature. The aim of this report was to investigate the effects of a nature trip to the ocean on mentally and developmentally disabled children's growth and development based on the qualitative analysis of a questionnaire administered to parents. Results show that parents' main hopes for the ocean experience program were "enjoyment" and "new experiences," and they felt that the children enjoyed the outing and were greatly satisfied. Parents' expectations for the ocean nature experience program were that it would stimulate their children's mental, spiritual, sensory, and physical development. The responses regarding the timing of the appearance of effects varied among parents. Even for normal children, the timing of the appearance of effects differed depending on the individuality and developmental stage of each child. In disabled children, who not only have general individual differences but also differences in the type and severity of disabilities, the appearance and timing of the same effect would be even more diverse. The significance and effect of nature experience activities was to support growth and development of rich humanity, independence, physical strength, and health. From the perspective of parents, it became clear that eliminating disparity in experiences is indispensable for eliminating the disparity in education that aims to develop a zest for living.

保護者からみた発達障害・知的障害を持つ子どもたちの自然体験活動による成長と発達

渡 部 かなえ

1. 緒言

体験活動は生きる力の基盤や子供の成長の糧として重要である（文部科学省）^{1) 2)}。特に自然体験が育むセンス・オブ・ワンダーは生涯にわたって大切な影響を及ぼす（Carson, 1998）³⁾。しかし、障害を持っている子どもは自然体験の機会が限られており、子どもたちの間に体験格差が生じている。そこで日本では、「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」（内閣府、2016）⁴⁾に基づいて休眠預金を活用して「体験格差解消事業」が行われることになった。

この実行団体に選ばれた認定 NPO オーシャンファミリーは、児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたちを対象としたプログラムを3か年計画で行い、3年後に事業化を目指す「みんなの海遊びプロジェクト」を実施することとなった（認定 NPO オーシャンファミリー、2020）⁵⁾。

本研究は、プロジェクト2年目（2021年度）にプログラムに参加した子どもたちの保護者へのアンケートの質的分析を行い、自然体験活動が発達障害・知的障害を持つ子どもたちの成長と発達に及ぼす効果および初年度との比較を通して経験の積み重ねの効果について、子どもたちのことを

最も長く、最も近くでよく見てきている保護者の視点から明らかにすることを目的として行った。

2. 方法

2021 年度は 7 月 31 日、8 月 11 日、8 月 21 日の 3 回、活動を行った。プログラム参加者は、児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたち 27 名で、年齢は 5 歳～15 歳、内訳は男児 13 名・女児 14 名であった。全日程参加した子どもも 1 日だけ参加した子どももあり、各回の参加者はそれぞれ 17 名、21 名、24 名であった。

各回とも 1 日の実質の活動時間は 90 分（事前のライフジャケット装着や水分補給、日焼防止対策等の準備と、事後のシャワーや着替え、水分補給等を含めると 3 時間）であった。

活動内容（アクティビティ）は、初年度同様、海水浴・泳ぐ・浮く・海辺の生き物観察・ボディボード（小型で軽量のサーフボード）、シーカヤック、大きなフロート（複数人の子どもが乗っても浮いている浮き具）に乗る・フロートから海にダイブする、砂浜での砂遊び等から、子どもたち一人一人がやりたいことをやる・チャレンジするというものであった。なお、子ども 1 名に最低 1 名のボランティアまたは児童デイケア施設スタッフが必ず付いて、一緒に活動しながら安全確保と体験の共有をするようにした。そして海辺の活動の専門家であるオーシャンファミリーは、アクティビティの提供とその安全な実施、および全体の安全管理を、海中と陸地（浜）の両方から担った。

調査は、オープンエンド型の質問（回答者本人および子どもの属性に関する質問のみ数値回答や選択肢式）からなる無記名のアンケート用紙を、

デイ・ケア・センターを通して保護者に配布し、調査への協力を依頼した。アンケート結果の解析は質的研究手法である主題分析 (Braun and Clarke, 2006)⁶⁾ を用いて行った。

アンケート（＊）の主な質問内容は

- (1) 海遊びを通して何を感じてほしいと思ったか、どんな体験をしてほしいと考えて 2021 年の活動に子どもを参加させたか
 - (2) 海遊びを終えて帰宅した子どもの様子
 - (3) 海遊びは子どもたちにどのような影響・効果があると思うか／その効果・影響はいつ頃、どのように表れると思うか
 - (4) 子どもと（家族で）海に行きたいと思うか
- であった。（＊アンケートの全内容は文末の添付資料に記載）

3. 結果

回答者数 24 名、回答率 100% で、活動に参加した子どもの保護者全員から回答を得ることができた。

表 1：海遊びの前に、子どもたちに感じてほしい・体験してほしいと思ったこと

楽しんでもほしい	10
新しいこと、普段できないこと	9
他者との交流、友達と遊ぶ	7
親にはできない・やってあげられないこと	4
自然とのふれあい	2
楽しい経験をしながら、怖さも知ってほしい	2
泳ぐ体験、マリンスポーツの体験	2

一人一人の保護者の回答に複数の内容が含まれていたため、回答数の計は回答者人数の24を超えている。その中で最も多かったのは「楽しんでほしい」であった。この回答はプロジェクト初年度（2020年度）も上位2つの回答の1つで、初めてでも複数回の参加でも、「楽しんでほしい」というのが保護者の一番の願いであることが分かる。次いで多かったのは、「新しいことや普段できないことを体験してほしい」という回答で、2020年（初年度）より増えていた。他者との交流や友達と遊ぶことを経験してほしいという回答は、2020年も本年度も一定数あった。

子どもが海遊びに参加するにあたって、サポートしたほとんどのボランティアと児童デイケア施設スタッフが願っていたのは「楽しんでほしい」ということであった。また、自然や生き物に触れることによるセンス・オブ・ワンダー（レイチェル・カーソン）も多くのボランティアと児童デイケア施設スタッフが期待していた。加えて、体験の機会が少ない子どもたちなので、これまで経験したことがない体験することへの期待も大きかった。さらに他者との交流も少なく、信頼し合える人の範囲も限られている子どもたちなので、活動を通して他者と交流でき、仲間づくりや信頼関係を構築することへの期待や、日常の活動レベルが低い子どもたちが多いので、思い切り体を動かしてほしいという願いもあった。なお、水を怖がる子どもには、怖がらなくなって楽しんでほしいという願いが、逆に危険を察知できない子どもには、楽しみながらも危険（怖さ）を知ってほしいという思いがあった。

保護者が期待し願うことはほぼ2020年と同様であったが、2020年は初めての体験に緊張してしまったりしてあまり楽しめなかった子どもの保護者は、「2021年は楽しんでほしい」と願っていた。また、2020年に楽しめた子どもの保護者は、2021年は楽しむことに加えて、子どもたちの新た

な体験や出会い、挑戦への期待をいただいていた。また、親側の変化として、子どもが親から離れて自立しチャレンジしていく姿を見守ることができるようになった、という回答があった。

表 2：海遊びを終えて帰って来た子どもの様子

楽しかった、ということが分かった、満足感や充実感が感じられた	21
楽しかったことを、思い出して話したり、家族に伝えようとした	11
また行きたい、もっとやりたいと言っていた	5
よく眠れた	2

子どもたちが楽しかった思い出を話したり、「また行きたい・もっとやりたい」と言っていて、子どもたちが楽しい経験をしたことが保護者に伝わっていた。また言葉でうまく表現できない子どもも、活動時に撮影した写真や映像を見てニコニコして声を出して笑ったりしていて、楽しかったのだと保護者には分かった。また、たくさん身体を動かして満足し、気持ちも落ち着いてよく眠れたという回答もあった。

参加して楽しかったという事後の感想は 2020 年と同様であったが、2021 年は、行く前から楽しみにしていた、これから楽しいことをするのだという期待でワクワクしていたという回答が多かった。また、2020 年は、初めての体験に戸惑い、不安がったりぐずったりした子どもも、2021 年は落ち着いてスムーズに準備や活動参加ができたり、自分から積極的にやろうとする姿が見られたとのことであった。

表3：海遊びは子どもたちにどのような影響・効果があると思うか

発達を促す	(心の成長、感覚が刺激される、身体機能・運動能力・体力の合計)	計 15
	心の成長（自信、自立、チャレンジ、好奇心、感動など）	9
	感覚が刺激される	3
	身体機能・運動能力・体力	3
リラックス、心の安定、ストレス解消		7

最も多かった答えは発達を促すことで、特に、自信が持てる、自立につながる、チャレンジしたり創意工夫をするようになる、好奇心を持つ、感動するなどの心の育ちへの影響や効果があると保護者は考えたり感じ取ったりしていた。また、海辺の活動でいろいろな感覚が刺激されたり、普段は感じることのない感覚（水に浮く感じや水遊びで感じる感覚）を経験することによる効果や身体機能や運動能力、体力の向上もあげられていた。リラックスや心の安定、ストレス解消の効果をあげている保護者も多かった。

そして、それらの効果は、すぐに表れるものも、長期的な影響・効果となって表れるものもあると保護者は考えていた。すぐに表れるものの代表は、楽しい経験ができる、水が顔にかかっても大丈夫になりシャンプーや洗顔がスムーズにできるようになる、リラックス・リフレッシュ効果、食事がおいしく食べられる、よく眠れる、できたことが自信になる、などであった。長期的な効果は、自信につながり学校生活でもチャレンジできることが増えてくる、経験したことを基に自分でいろいろなことができるようになる、自立につながる、等であった。また、自然の大切さや自然と人との関係なども考え理解するようになることが期待されていた。

なお、自信につながる・普段の生活や学校で生きてくるは、「すぐに表れる効果」と考えている保護者と「将来・いつか表れることが期待される効果」と考えている保護者がいた。

1 回の経験でも効果が得られるが、繰り返すことによって、感覚過敏などは解消されていくし、楽しいことも怖いこともあるという複数回の体験からの学びの深まりが期待されていた。

また、海辺の自然体験活動ならではの効果としては、海が好きになる、海が楽しい場所になる、海での楽しい経験が生涯にわたる大切な思い出になり、大きくなったらその思い出をたよりに自分から海での活動に参加できるようになることなどがあげられていた。

表 4：子どもと（家族で）海に行きたいと思うか

行きたい	（子どものために、自分が子どもと海で楽しみたいから、他の合計）	計 15
	子どものために 行きたい	9
	自分が子どもと海で楽しみたいから 行きたい	5
	その他	1
（条件付きで）行きたい		6
行きたくない		1

行きたいという回答が 2020 年よりも多くなっていた。半数以上は、子どもに楽しい経験をさせてあげたい、自然や季節を感じられることが子どもにとって大切だと思う、等、子どものためがその理由であった。自分が子どもと海で楽しみたいというのは、2020 年は無かった回答で、2020 年の経験から、「子どもと一緒に親も楽しめる」「子どもだけでなく家族みんなが楽しめる」と保護者が考えるようになったことが分かる。

行きたくないという回答は 1 名のみであったが、それは保護者だけでは安全確保に不安があるからであった。

条件付きで行きたいという回答も、その条件とはほとんどが「安全が確保できること」であった。それ以外は、コロナ禍で海も人が少なかった 2020 年・2021 年は人混みが苦手な子どもも落ち着いて海で活動すること

ができたが、多くの人が海に来るようになるとパニックを起こすのではないかという不安や、身体障害も併せ持つ子どもはオーシャンファミリーが用意した特別なバギー（水陸両用、砂浜でも車輪がめり込まないで進める）で海で遊ぶことができたが、そのようなツールやギアの問題をどう解決していくかが課題となっていた。

4. 考察

2020年度同様、2021年度も、保護者の期待・願いで最も多かったのは「楽しんでほしい」であった。この回答はプロジェクト初年度（2020年度）も上位2つの回答の1つで、初めてでも複数回の参加でも、「楽しんでほしい」というのが保護者の一番の願いであることが分かる。他者との交流や友達と遊ぶことを経験してほしいという期待も2020年・2021年にもあった。発達障害を持つ子どもの中には他者との人間関係の構築が難しい子が少なくない。友達と一緒に海で楽しく遊ぶ経験を通して、他者と交流できるようになり人間関係を築いていくことができるようになってほしいと保護者は期待していることが分かった。

また2020年にプログラムに参加した経験から、子どもたちは2021年は見通しを持って落ち着いてあるいはより積極的に活動に参加できるようになっており、経験の積み重ねが見通しを持った行動ができるという成長につながっていた。

また、発達障害や知的障害を持つ子どもには、感覚受容の発達の遅れやアンバランスがある場合があるが、海辺の活動でいろいろな感覚が刺激されたり、普段は感じることのない感覚（水に浮く感じや水遊びで感じる感覚）を経験することによる、不快感の軽減効果、気持ちがよくリラックスできるというプラスの効果も大きかった。

海辺の自然体験活動の影響や効果は、短期的なものも長期的なものもあったが、例えば「自信につながる・普段の生活や学校で生きてくる」のように、同じ効果を「すぐに表れる」ものと捉えている保護者と「将来・いつか表れることが期待される」と考えている保護者がいた。この違いは、子どもの個性や障害の程度、発達段階によって異なると考えられる。健常児についての先行研究^{7), 8)}でも、「お手伝いをするようになった」、「自信をもって行動するようになった」、「自分のことは自分でできるようになった」、「たくましくなった」などのさまざまな発達段階の多様な育ちや学びが報告されており、個性と障害の多様性を併せ持っている障害児では、同じ効果でも、その表れ方や表れるタイミングはさらに多様なものになると考えられる。

子どもと（家族で）海に行きたいと思う保護者が前年に比べ多くなっていた。「子どものために」という回答が最も多く、その傾向は前年と同様であったが、前年には無かった「自分が子どもと海で楽しみたいから」という回答が2021年度にはでてきた。障害を持つ子どもを特別扱いしてきたのは学校や社会だけでなく、実は家庭内でも障害を持つ子どもを特別扱いしていたのである。障害児教育は「隔離」や「特別扱い」からインクルーシブへ発展してきているが、「（障害を持つ特定の）子どもだけでなく家族みんなが楽しむ」と保護者が考えるようになったのは、海辺の自然体験活動への親子での参加が、家庭内でもインクルーシブな考え方が「普通の当然のこと」になるきっかけになったと言える。

自然体験活動の意義と効果は、豊かな人間性や自主性、体力・健康などの生きる力の基盤を育み、成長と発達を支援することにあつた。そして体験格差を解消することは、生きる力を育む教育の格差を解消するためにも不可欠であることが、保護者の視点からも明らかになった。

5. 謝辞

本研究は、B&G 財団の休眠預金を活用した体験格差解消事業の実行団体として選ばれた認定 NPO 法人オーシャンファミリーからの委託を受け、研究支援をして頂いて実施しています。またデータの整理で墨田雪香さん（神奈川大学）にご協力いただきました。

【参考文献】

1. 文部科学省、体験活動の教育的意義、（閲覧：2022 年 6 月 11 日）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm
2. 文部科学省、平成 28 年度 文部科学白書、第 1 部 特集、子どもたちの未来を育む豊かな体験活動の充実、第 2 節 青少年の体験活動を推進するための取り組み、3 体験活動 pp41-51、2016.
3. Carson R. (1998) , The sense of wonder, HarperCollins Publishers, New York.
4. 内閣府（2016）、民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律、
https://www5.cao.go.jp/kyumin_yokin/law/law_index.html（閲覧：2022 年 6 月 9 日）
5. 認定 NPO 法人オーシャンファミリー（2020）、【休眠預金】実行団体に選ばれました！ <https://oceanfamily.jp/2020/07/41499>（閲覧：2021 年 6 月 9 日）
6. Braun V., Clarke V. (2006) , Using thematic analysis in psychology. Qual Res Psychol, 3: 2, 77-101.
7. 学研教育総合研究所（2010）、B&G 財団●平成 20、21 年度海洋教育事業 自然体験活動の効果に関する調査（抜粋）、（閲覧：2022 年 6 月 11 日）
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusuken/event/data/100222/bg-hosoku.pdf>
8. ブルーシー・アンド・グリーンランド財団（B&G 財団）（2011）、日本財団 助成事業、自然体験活動の効果に関する調査研究、海と出会い自分と出会う～自然体験活動が育むもの～

【添付資料】 アンケート

体験格差解消事業 ○○○○○○○プログラム（*）アンケート

〈保護者用〉

海遊びが子ども達の心と体のより豊かな育ちに繋がっていくこと、子どもだけでなく保護者の皆様やスタッフの方にとっても実りある機会にしていくために、皆様の声を聞かせて頂き、検証に役立てたいと考えています。このアンケート調査は、子どもたちに直接聞くのは難しいので、子ども達のことをいつも見ていらっしゃる保護者の皆様やスタジオ未来のスタッフの方に、ご自身の言葉で回答して頂き、平均や標準偏差などの数値では分からない事柄を調べることを目的としています。表裏（両面）への回答をよろしくお願い致します。

認定 NPO 法人オーシャンファミリー&渡部かなえ（神奈川大学）

1. あなたの 年齢（ 才）、学年、性別（男・女：○をつけてください）
- 2-1. この海遊びのプログラムも2年目になりました。今年の活動に参加する前にお子さんに海遊びを通して何を感じてほしいと思い、どんな体験をしてほしいと考えて、今年の活動にお子さんを参加させましたか。
- 2-2. （昨年もお子さんがこのプログラムに参加した保護者の方へ）それは昨年、思ったことと同じですか、違う点がありますか。
- 3-1. 今日の高遊びの活動を終えて帰ってきたお子さんの様子はいかがでしたか。
- 3-2. （昨年もお子さんがこのプログラムに参加した保護者の方へ）昨年と比べて今日のお子さんの様子は、どのような点が同じで、どのような点が違っていましたか。
- 4-1. 海遊びは子ども達にどんな影響・効果があると思いますか。（短期的な影響・効果と長期的な影響・効果があるとお考えの方は、分けてお書きください）

- 4-2. その影響や効果は、いつ頃、どのように現れると思いますか。(短期的な影響・効果と長期的な影響・効果があるとお考えの方は、分けてお書きください)
5. お子さんと海に行きたいと思いますか、思いませんか。また、そう思う理由を書いて下さい。
6. その他、何でも。感想、ご要望や疑問など、書いて頂けると参考になります。

ありがとうございました。